

装甲神器村正

サンマ味のヨーグルト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは魔王の物語ではない。

善悪相殺を誓う者は不要である。

これは人間の物語である

陰気な雰囲気は恐らく不要である。

※不定期です、気分が高揚した時しか書けない

※展開遅い

※キャラおかしい、口調おかしい

※湊斗さんのキャラが少し軽い

※設定適当

※善悪相殺の自戒は無い

これでも許せる人は見てつてね  
感想、お待ちしております

第  
1  
話

目

次

1

# 第1話

神器——それは「聖書の神」が生み出したシステムであり摩訶不思議な力を所有者に与える。能力は様々で魔剣、聖剣を創るモノ、人を癒すモノ、魔獣やドラゴンなどが封印されたモノ、色々なモノが確認されている。これらは人間の血が入っている者にしか発現が確認できていない。神が人に与えた祝福なのだろうか、もしくは人が化外を滅ぼすのを推奨しているのか、誰にもわからない……そして神器は所有者の善悪を問わない、問えないのだ。

例えば、筋肉隆々の男が回復系の神器を持つているとしよう。せつせと仲間を回復するのを見て、「お前のイメージに合わない」や「狂戦士の如く戦わないのか」「男に回復されても嬉しくない」等々、思つていても仕方のない事だ

次に、聖女のような心清らかな女性が毒系の神器を持つていたとしよう

彼女自身がどれほど清らかであろうとも、「毒でいつか殺される」、「悪魔の力」等々、揶揄されても仕方のない事だ

そして次に神器の上位——神滅具、と格付けされた神器それは神すらも滅ぼせる可能性の力を持つ特別な神器、これらは13種確認されている

神滅具を持つ所有者は危険と判断されており、監視されているか、殺されている

危険なので、という名目で罪もない人間が勝手な都合で殺されている

総ての神器は転生、いや所有者が消えると他の人間に乗り移るのだ。つまり、繰り返される

善悪は関係無い。止められない輪廻。神よこれは呪いか

しかしこれは人間の自由を謳つた可能性であり唯一の人間の武器

だ

故に

「…………テメエ……何モンだよ、俺を殺そうとしに来た哀れな哀れな賞金稼ぎさんか？」

真夜中、酷く鬱蒼とした森の中に立っているのは声は普通の女性であるが四本の腕が生え、下半身が牛のソレとなつている異形の存在——つまりは化外である。

化外は食事の邪魔をされたのか酷く不機嫌である

対面に存在しているのは、血を被つたかのような深い深い色をした紅い武者、武者は肩に添えられた大きな刀に手を添えて、いつでも戦闘態勢に入れることだろう。静かに佇んでいる

「誰だつて訊いてやつてんだろうがああああああああ!!!!」

何も答えない赤武者に苛立つたのか化外が吠える、化外が吠えた咆哮は森に生息している生物すべてに恐怖を与えていた、狼も、熊も……しかし赤武者は少しも動いていない

「一身上の都合にて…………貴方を殺害する」

やつと声が聴こえたが、言葉はそれである

その言葉が逆鱗に触れたのか、獲物を前に待てなくなつたのか  
異形の化外が武者に飛びかかる

対する武者は全く身じろぎしておらず、ただ刀を両手で握った

影が交差する……残つたのは武者と武者の刀を鞘に戻す音のみ

異形は眼球を白目に露出させ、4本あつた腕は半分になり、切り落とされた下半身と共に重力に従いパタリと倒れ伏す

「…………ただの通り魔と覚えておけ」

神器は人間の為の可能性である、人間の為に作られた人間に与えられた武器である

悪魔堕天使天使が持つ異能とは違う正道の異能  
故に

——化外が人間の力をどうこうするなど一切合切

不要である

“対異形特務警察官”それは人外の存在、“悪魔”“墮天使”“妖怪”人間以外の存在から人間を守るある意味特殊な役職

八咫烏や陰陽師と違い、その道の者や墮天使、外国人といった様々な人種で構成されている

先ほど赤武者——湊斗景明は若輩者の身であるが就いている

主な仕事ははぐれ悪魔も討伐、人を殺しまわるはぐれ墮天使の排除等々、

神秘の秘匿に奔走する雑用の毎日だつたりする

そして先ほど討伐が終了した影明が向かっているのは“対人外特別警察署”と名付けられたボロイ一軒家

見た目は田舎にありそうなボロ屋、電気は通つてなきそうだし。水道すらあるのかも疑わしい。看板だけは大理石に大仰に彫られていてるので酷く不釣り合いである

そしてここは田舎の村でなく都会の町である。周りにはビル逆に目立つていて

上司は逆に目立ちませんわ、とか言つておられたがどこに逆が存在するのか、普通に目立つていて

例えはほら、そこに歩いている男女カツプル

「ちよマジで、こんな町にボロイ小屋があるなんてマジで！」

「ちよWおま、見ろよコレ対人外特別警察署だつてよ、WWドコの中二病だしWWなんで大理石なのWW」

…………神秘の秘匿とは一体なんなのか…少なくとも一般にまき散らすものではない

若者達がここから去るのを待ち続けて三時間が経つた、彼らはむしろ増えている

携帯のシャツターがパシヤパシヤ鳴つて从此から仲間に広めているのだろう

最早10人は過ぎていた

もしかすると彼らは無限に増殖するのではないか。社会的弱者が不撓不屈の信念を持ち、仲間を集め社会的強者を打倒するのではないか。今務めている警察署を台頭に社会に思い知らせるのではないか――と景明の頭にはいつの間にか彼らが社会に対して陰謀を弄していると勘違いし始めている。ここまで至るのに二時間かかった……無駄な想像力である

「しまった……大鳥所長をほつたらかしてしまった……きっと怒つておられるに違いない」

完璧に忘れていた存在を思い出す

大鳥香奈枝――わずか18で名家大鳥家を継ぎ、そしてたつた2年で家を抜け、従弟の人間に継がせた何がしたいのかよくわからぬ御仁。いつも優雅に振る舞つているが独特のギヤグセンスを持ち、景明自身何がしたいのか理解できない、若輩の想像の範疇を超えた傑物である

しかしながらカリスマを持つていて、この組織を建てたのも彼女であり様々な種族の者が在籍する

しかし彼女の本当の武器と言えば交渉術であろう、たとえどれほど の不況でも何かをもぎ取つてくる。この大理石ももぎ取つて来たものだ……もつとマシンモノを持つてこいと思うのは俺だけだろうか

大鳥所長は何故か自分に甘いが、ここまで待たされれば般若の様相となつてゐるだろう

内心焦りながら未だにわらわらと集まる若者を見る  
どうする？搔き分けて中に入るか……それともここで待つか

宙を仰ぐ

何か解決案は――――――自分の携帯が鳴り響く、確認すると  
『愛しのハニー♡』と表示されていた

……いつの間に

「……………もしもし」

『YEAH!!』

……………。

「……………」

スツ

『あっ、今電話切ろうとなさいましたでしょ!?』

「いいえ。頭を抱えてわけのわからぬことを喚きつつ走り出そうとし  
ただけです」

『そう？ならいいのですけど』

先ほどまで想像していた態度とは正反対の何事も無かつたかのよ  
うな聲音な所長

弾劾するような雰囲気は感じない

「それで……ご用件は」

『それはですわね、あ、婆やそれ私のだから……返せよ！それが残  
しておいた饅頭だから!!』

『おやおや、お嬢様、これ以上食べなさると太りますが、よろしいので  
しょうか』

「……………」

永倉さよ

幼い頃より大鳥所長の従者を務める老婦人。徹底したサポートに  
努めるが、単体の戦闘力としては自分より上だ

慄懾無礼なところもあるが、普段は好々婆で通っている。

年齢は不明

『あら、そうなの……でも勝手に食つたのは許さんからな』

『ほほほ、かかつてきなさい』

『クケ———!!』

携帯越しに賑やかな声が聴こえてくる、一体何がしたいのだろうか  
無駄に時間は過ぎてゆく。

ここにやつて来た時間帯は太陽が真上に照っていたのを記憶しているが

今は右に沈んでいる

「大鳥所長」

『あら……ハア……ハア……何で……ございましょうか景明様？』

『あら、構えませんわよ?』

四〇

景明は自分の付近に転がっている、4つのペットボトルを駐車場に備え付けられているごみ箱に中々見事なコントロールでペットボトルを投げ入れた後、帰宅の準備をした

妹は遅くに帰宅すると中々如何してうるさいのだ。

故に妹が帰宅する同じ時間帯、定時に帰宅することを心掛けている精神が、サラリーマンのそれだ

「今日の晩御飯は何だろうか」

そして景明は徒歩で帰宅した。

「そういえばお嬢様、湊斗様からの報告を聞いていませんでしたね」

「あ」